

今年下半期の個人的なベスト作品

先日、158回（2017年下半期）直木賞の候補作が発表されました。これにならって、今年の6月以降に発行された本の中から、個人的なベスト作品を選んでみました。

1冊目は、柳広司/著『風神雷神』です。

今年は、京都国立博物館開館120周年にあたり、全てが国宝という記念特別展覧会が開催され、約200件の国宝が公開されました。この中で、「風神雷神図屏風」は目玉的な作品でした。「風神雷神図屏風」を描いた俵屋宗達が物語の主人公です。名前の「俵屋」は彼が継いだ店の屋号で、扇を製作する絵画工房でした。彼の絵付けをした扇は、独特の意匠で評判を呼びました。踊りの名手・出雲の阿国や、万能の文化人・本阿弥光悦と関わる中で、扇以外の絵も手掛けるようになり、最後には「風神雷神図屏風」を描きます。

2冊目は、長辻象平/著『半百の白刃』です。

タイトルの半百とは百の半分で50歳を意味しています。江戸時代初めの頃の50歳は、寿命が尽きる平均的な年齢でした。甲冑師だった虎徹は、その年で刀鍛冶に転身し、由比正雪の隠し資金争奪や伊達家のお家騒動に巻き込まれながらも、刀鍛冶として精進します。物造りとしての刀の制作過程もリアルに描かれています。約200年後・幕末に新選組が名を挙げた池田屋事件で、新選組局長・近藤勇が「池田屋騒動の時に隊士たちの刀はひどく傷んだのに自分の刀は虎徹であるためか無事だった」と書いた手紙が残っています。美しく、よく切れ、かつ強靱な刀だったということです。虎徹の作った刀は、5振りが国の重要文化財に指定されています。

3冊目は、塩田武士/著『騙し絵の牙』です。

芸能事務所と大泉洋本人との共同企画により、明るさと才知に長けた主人公に俳優・大泉洋をあてがきして物語を創作した作品です。雑誌の編集部を舞台にして、大きく変わりつつあるエンタメ産業全体を描いています。物語の内容が現実とリンクしていく可能性があるかもしれない、と思わせてくれる物語です。

4冊目は、馳星周/著『神の涙』です。

北海道・屈斜路湖を抱く街で、自然を敬い生きるアイヌの木彫り作家・平野敬蔵。その孫娘で、アイヌであることを消し去りたいと、都会の学校への進学を夢見る・悠。誰にも明かせない過去を抱え、自らのルーツを辿る雅比古。この3人が出会って、物語が動き出します。作者の生まれ故郷・北海道を舞台に、自然を大きなテーマにして書き上げた作品です。

5冊目は、松家仁之/著『光の犬』です。

北の町に根づいた一族三代と、その傍らでひとびとを照らす北海道犬の姿。家族の記憶を軸に、100年にわたる一族の、たしかにそこにあった生のきらめきと生の陰りを、ひとりひとりの記憶をたどるように、行きつ戻りつ描き出しています。